

かつて、村の男たちは早起きして、活き餌になる川エビを捕りに山中の小川まで出かけたものだったが、今ではほとんどの漁師たちが店で売っている冷凍エビを使っている。海に出ると、エビをトビウオ釣り用の針人引っ掛ける。それにトビウオがかかると、今度はそれをもっと大きな釣り針に仕掛けて、大型のシイラやカジキマグロを狙う。

数週間毎日のように、私は夜明けとともに村の男たちと一緒に漁に出かけた。海に出ると、島は朝日に輝いて、見慣れた島とはまるで別物のように美しかった。タタラ舟に乗った男たちが前後に艀を漕ぎながら、歌を歌って、アラヨをそれぞれ自分の舟の方におびき寄せようとする。そうして何日も海の上で過ごしたが、一匹も掛かったところを撮影できなかった。というのも、毎日15人ほどが出漁して、大きな魚が捕れたのは一人か二人だったし、それも島から1、2キロ沖合の広い海域に、それぞれのタタラ船が間隔をあけ、散らばって漁をしていたのだから無理もない。魚が掛かった様子はしばしば目撃し、急ぎパドルを漕いでその舟に近づいてはみたものの、時すでに遅し、魚は竿から外れて逃げてしまったか、すでに縛り上げられて舟の中に横たわっているかだった。

イラタイという隣村からやって来たばかりの若者だった私が、舟を転覆させるという忘れられない事件があった。初めて体験するトビウオの季節だった。餌に食いついたカジキマグロのあまりのスピードに驚いて、つい釣竿の糸を緩めるのを忘れたため、魚は暴れて釣り針を引っ張り、タタラ舟ごと海中に引きずり込んでしまったのだ。それでも必死に舟を立て直し、魚を水揚げしたのは、我ながら天晴れだったと思う。海で何が起ころうと、多くの村人たちは岸辺に列になって、漁師たちが帰ってくるのを待ちかまえる。そしてもし獲物があれば何を捕ったかを見定める。漁師なら誰でも、取り逃がしてしまった大きな獲物の話は語れるものだ。しかし村人たちは、実際に持ち帰った魚でしか漁師を判断しない。

5、6日経ったところで、私は撮影方法を変え、経験豊かな一人の漁師に付いて、彼が獲物を水揚げするところまでを追うことにした。その漁師はイモロッド村出身の現役最高齢のシャプン・マカラッシュ(68)。シャプン・マタヌン(チヌリクラン船長)の親友で、チヌリクラン建造の折、一緒に森に入って船板づくりをしたので顔見知りだった。

その日は、その年マカラッシュが初めて漁に出た日だった。舟底には若い雄鶏が紐でくくられていた。初漁でアラヨが捕れたら、感謝のしるしとして捧げる生贄になる。マカラッシュは岸から1キロ沖に出たところでエビの生餌を投

げ入れ、アラヨを呼び寄せる歌を歌いながら艀を漕いでは行ったり来たりした。するとほどなく大きな魚が掛かかってきて、格闘の末、舟に引き揚げた。その後の話は、短編記録映画「アラヨの歌」の通りである。

2007年初め、映画が完成した。DVDにコピーしてマカラッシュに送ったが、その時彼はすでに癌で、病状が重くなっていた。病院の看護婦の話では、もうあまり長くはないとのことだった。6月、最後にもう一度彼に会うため、蘭嶼に向かった。彼の身体はすっかり前かがみになっていて、咳込みも激しかったが、親戚の反対を押して、その年のビウオ漁に出かけると言って聞かなかった。私が送ったDVDは、どうしたら見られるのかわからず、人に頼んでまで見たくなかったのかそのままになっていた。私がDVDプレーヤーをセットして見せると、2年前の、アラヨを捕えた自分の姿を見て微笑んだ。その後、彼の親戚が語ってくれたところでは、残された日々、見舞いに来てくれた客にしばしばこの映画を見せていたという。11月の終わり、友人が電話で、マカラッシュの病状がひどく悪いと知らせてきた。彼と短く電話で話した。それが私たちの最後の会話になるとは露知らずに。それから3日後、マカラッシュは亡くなった。彼と共に膨大な伝統的知識が失われてしまった。そして、ほんの少しが「アラヨの歌」に残された。

Production Notes : ‘Song of the *Arayo*’ by Andrew Limond

『台湾原住民研究』第13号（2009年11月20日発行）風響社

（和訳：三浦庸子）